

Title	Blinded by Color : The Inability of W.E.B.DuBois to See Japan Accurately during the Interwar Period
Author(s)	McCreary, Rashied Hasan
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/58799
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏名	McCreary, Rashied Hasan
本籍(国籍)	
学位の種類	博士(日本語・日本文化)
学位記番号	甲第73号
学位授与年月日	平成19年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	Blinded by Color : The Inability of W.E.B.DuBois to See Japan Accurately during the Interwar Period
論文審査委員	主査 教授 松田 武 副査 教授 竹内 俊隆 副査 准教授 杉田 米行 副査 教授 嶋本 隆光 副査 准教授 中嶋 啓雄

論文の内容要旨

「肌の色の違いによる人種差別が20世紀の問題になる」。アフリカ系アメリカ人学者 W.E.B. Du Bois が20世紀初めに語った言葉だ。不運にも彼の予言は正しかった。

人種問題についてさまざまな議論が繰り広げられ、社会学も発達してきたにも関わらず、解決への進展はあまり見られない。私たち国際社会は議論を重ねてきたが、この問題に真摯に対峙してこなかった。

聡明な Du Bois 博士は、19世紀後半から20世紀半ばにかけて、人種差別問題と戦い続けた。彼は、今日人種差別との闘いの先駆者、そしてアフリカ系アメリカ人の救済の父とされている。Marcus Garvey のように、たとえ Du Bois に異論を唱えても彼の研究の影響を受けた活動家は多い。Du Bois は、自分自身とアメリカ黒人の将来を同一視していた。

Du Bois はその鋭い洞察力で、社会に何が起きているのかを見極め、その問題の背景を冷静に分析できる社会学者だった。しかし、彼のアジアに対する理解と日本支持に関しては、その明敏な観察力が働かなかつたと言えるだろう。これは悔やまれるべき事実だが、彼が生きた19世紀末から第2次世界大戦至るまでのアメリカ社会の状況を考えれば、彼が現状に幻滅し、国外に目を向けてアメ

リカ以外の道を受け入れようとした彼の行動は容易に理解できよう。

この論文では、アフリカ系アメリカ人のアジア、主に日本と中国との関係に関するこれまでの研究に新しい観点を導入することを目的とし、Du Bois 博士のそれに関する見解についても論じる。

Du Bois の見解をいかに正しく理解するかが現代の論争の的となっており、それには彼がなぜアジア、とくに日本に強い関心を抱いたのかを明らかにする必要がある。彼が日本に魅了された理由が明らかにされれば、彼の考えの全体像を理解できるからである。

この論文の論点は大きく分けて2つある。第1に、日本と中国をはじめとするアジアとの関係における、アフリカ系アメリカ人の国際主義を明らかにする。つまり、アフリカ系アメリカ人が、地理的また文化的にも遠く離れたアジアの国際政治の内部構造を把握することができただろうかということだ。

そして第2に、Du Bois が問題提起した、白人による黒人差別という構図は、アメリカ国外に適用するには限界があった。

20世紀初め、「人種」という概念は、異なる人種を識別するための最も重要な要素として用いられていた。筆者はこの「人種」という言葉が、アフリカ系アメリカ人が苦闘しながらも前に進んでいた動乱の時代において、どのように使われていたのかに関し、Du Bois の視点を踏まえながら、さらに深く検証する。この研究と分析を通して、筆者は日本がアフリカ系アメリカ人社会、そして Du Bois にとって極めて重要な存在であったことを証明する。これは Du Bois がドイツ、中国、日本について述べた文献を比較分析することで明らかになるだろう。

当時、アメリカ黒人がそれまで長年にわたって耐えてきた苦痛と葛藤を考えれば、Du Bois が変革を切望していたのは明白だ。だが、その変革は部分的もしくは表面的な変化ではなく、実質的かつ体系的な社会変革であった。彼はアメリカ国内で人種差別問題と戦っていた時でさえ、彼が構想し

ていた変革の契機は合衆国の国内からではなく国外からやってくると考えていた。アメリカのような嘘と偽善で塗り固められた国には、人種問題の解決という偉業は成し遂げられないと考えていたのだ。それで彼は、当時進歩的と映った日本や中国、ドイツなど外国に目を向けたのである。

彼がなぜ日本に魅惑されたのかは容易に理解できる。まず、短期間で急激な発展を遂げた日本は西側諸国に対抗するまでに存在感を増していた。政治や社会制度は健全で、さらには日清、日露戦争での戦いぶりから軍事的にも一目置かれるほどの国力をつけていた。これらを背景に、Du Boisが日本に変革をもたらす可能性を見出していたのは確かだ。

しかし、Du Boisが日本に傾倒していった最大の要因は、日本が有色人種の国だったということである。結局のところ、彼はアメリカでも西側諸国でもない、白人国家ではない国を求めているのである。そして、その答えが日本だったのだ。

彼は、まるで日本が自国のみならず、全世界の有色人種のために西欧帝国主義の侵攻を阻止しようとしていると認識してしまった。彼が国際社会における権力闘争に疎かったとまでは言わない。彼の中にあっただのは、希望だったのだろう。日本のような台頭著しい有色人種の国が最終的には、白人至上主義の思想、人種差別の体系を変えてくれるのではないかとの強い願望だった。

ここで問題となり、かつ明らかにせねばならないのは、Du Boisが国際関係という文脈の中で、日本人をどの程度まで理解していたかということだ。彼は日本の軍国化の動機を正確に見極めるのに、十分な時間を費やしたのだろうか。ドイツやアメリカなど西側宗主国に対してそうしたように、なぜ彼は厳しい目をもって日本に対して批判的にならなかったのか。ただ、日本を世界の有色人種の擁護者だと見ていたからという理由で片づけてしまっているのだろうか。

もちろん、人種が社会の中で最も重要な要素であった当時の状況を考えれば、Du Boisのような人

間が日本を支持したのは大いに理解できる。だが一方で、なぜ彼をはじめとする有色人種社会は日本との協調に意欲的だったのかという疑問を投げかけてもいいのではないか。

また、当時を含め、日本社会には日本特有の差別が存在していることを忘れてはならない。それはヨーロッパの階級制度のような身分制度のことではなく、えた(部落民)やアイヌ人への差別である。

この論文は以下の3点において学問的に貢献する。まず、アメリカ黒人問題、そして国際社会における Du Bois と日本との関係について、Du Bois の運動と功績を検証する。次に、第2次世界大戦前の日本人とアフリカ系アメリカ人が、お互いに抱いていた関心と両者間の交流に光をあてる。そして最後に、「人種」の概念が時代の変化とともにいかに変化してきたかを明らかにする。人種概念の歴史的変遷を理解することは非常に重要である一方、学界をはじめ社会の人々も人種差別問題に対する観点や認識を変えていくこともまた肝要である。

論文審査の結果の要旨

ラシード・マクリアリ氏の博士論文「Blinded by Color: The Inability of W.E.B. DuBois to See Japan Accurately during the Interwar Period」(英文)は、デュボイスの言説、特に两大戦期の日本に関する言説を主たる分析材料として、これまで英雄視されてきたデュボイスの人物像の再検討と彼の黒人指導者としての再評価を通して広義のアメリカ研究および日米文化交流史研究に貢献するところにその主たる目的がある。

W.E.B. デュボイス (1868—1963) は、すぐれた学者として、またナイアガラ運動 (1905年)、全国黒人向上協会の創立 (1909年) への参加、パン・アフリカ会議 (1900—1945年) など、黒人の主体性の回復をめざす運動において、これまでアフリカ系アメリカ人の中で英雄として崇拝されるとともに、合衆国の内外からも大いに尊敬を集めてきた黒人解放運動の活動家である。リンカン大統領の奴隷解放宣言からちょうど40年目の1903年に出版された彼の著書『黒人のたましい』(邦訳は1965年)は黒人の精神性、人生哲学、それにヒューマニズムを著わした古典的作品である。

(博士論文の主張)

黒人 (アフリカ系アメリカ人) 社会の指導者デュボイスは、合衆国内の人種問題および社会問題に鋭い洞察力と優れた分析力を有した学者であり、また黒人解放運動の指導者としても活躍した。しかし日本に関してデュボイスは人種に固執したため、日本を正しく分析

し理解する力を鈍らせることになった (Blind by Color)。特に、ヨーロッパの白人の国 (ロシア) に有色人種の国 (日本) が近代史上初めて勝利した日露戦争、それに第一次世界大戦後のヴェルサイユ講和会議において国際連盟規約の中に人種差別撤廃条項の挿入を提案した日本の行動から、デュボイスは日本を白人の人種差別主義と闘う「チャンピオン」としてロマン化してながめ、日本に過大の期待と幻想を抱くようになった。頭脳明晰なデュボイスではあったが、人種問題の虜のようになっていたデュボイスの世界認識と分析力はこのようにして鈍り、それが原因で彼は日本帝国主義の本質を見誤り、1920年代から1930年代にかけての日本のアジア大陸における侵略行動を擁護する発言を繰り返すことになった。デュボイスは黒人解放運動家としてアフリカ系アメリカ人の間で高く評価されるのであるが、しかし彼の対日観およびアジア観を鑑みると、これまでのように無条件でデュボイスを英雄扱いすることは慎まなければならないし、むしろそのような英雄視されたデュボイス像は修正される必要があるだろう。

(論文主張の背景と評価)

従来の合衆国および日本におけるアメリカ外交史では、白人のエリート集団が主たる研究対象とされ、アフリカ系アメリカ人をはじめアメリカ社会の少数民族集団のアメリカ対外政策への関与とその歴史的貢献はほとんど触れられることがなかった。しかしながら1980年代以降は、特に近年においてアフリカ系アメリカ人、ネイティブ・アメリカ人およびその他の少数民族集団、女性などの歴史的役割とかれらのアメリカ合衆国の発展への貢献が注目され、歴史研究の中心的な対象とされてきた。

一方、日米関係史研究も1980年半ばまでは白人のアメリカ国家官僚エリートと日本の政府および高級官僚エリートの関係がその中心テーマであった。そのためにアフリカ系アメリカ人や少数民族集団はほとんど登場してこなかった。しかし、1986年9月22日のアフリカ系アメリカ人に関する中曽根首相の配慮に欠けた差別発言 (「米国には黒人とかプエルト・リコとかメキシカンとかそういうものが相当おって、平均的に見たら (知的レベルが) 非常にまだ低い」「今でも黒人は字を知らないのが随分いる」) や1980年以降の日本企業によるアメリカへの著しい進出と日本企業の現地人 (特にアフリカ系アメリカ人) 雇用問題によってアメリカ国民の間に反日感情と対日不信感が高まり日米関係が緊張した。そのような日米関係の新しい局面や上述した1980年代以降のアメリカ史学界の新しい研究動向を反映して、アメリカ人研究者の間で、遅きに失した感があるが、アフリカ系アメリカ人の対日観およびアジア観に関する研究が日米関係史ならびに日米文化交流史の一部として登場するようになった。

本博士論文は、研究対象および射程範囲からして、アメリカ研究の一部を構成するアフロ・アメリカン・スタディーズとアメリカ外交史の一部である日米文化交流史研究の両者にまたがる研究として性格付けられよう。また同論文は、黒人指導者デュボイス一人に絞って人種と対外関係という最近注目されているテーマに切り込んだ意欲的な研究であり、レジナルド・カーニー著『20世紀の日本人—アメリカ黒人の日本人観』(五月書房、1998) やマーク・ガリキオ著 *The African American Encounter with Japan and Japan: Black Internationalism in Asia, 1895-1945* (University of North Carolina Press, 2000) など最近の研究の流れに棹さすものである。さらに同論文は、従来のデュボイス研究がデュボイス

と合衆国内の人種問題や社会問題など合衆国内の諸問題に集中して行われてきたのに対して、デュボイスの言説を国際問題にまで広げ、特に日本、中国、ドイツに関する彼の言説を分析することによって、これまでの黒人指導者デュボイスの像に新たな一側面を加え、デュボイスの全体像を構築する上でささやかではあるが貢献しているといえよう。

とはいえ本論文に問題がないわけではない。

その一つは資料の吟味と検証の問題である。歴史研究には一次資料および二次資料の内容の信憑性に関する検証が必須であることはいままでもない。しかしながら、マクリアリ氏には一次および二次資料に対してあまり分析のメスを加えることなく、時おりデュボイスの言説をそのまま額面どおりに紹介する傾向が見受けられる。また同氏には必ずしも十分な資料による裏づけなしに主張を展開する傾向も時おり受けられる。歴史研究において、これらの点は基本的かつ重要な問題であり、氏にとって今後歴史研究を進めていく上で十分な注意を要する問題である。

次に資料の問題である。既述のとおり、本論文は英語で書かれている。日本語・日本文化特別コースの規定によると、英語を用いて博士論文を書くことが認められている。その点でマクリアリ氏が博士論文を英語で書くことに関して何ら問題はない。また氏を特別コースに受け入れる段階での氏の日本語運用能力からして、氏が英語で論文を作成するであろうことは当初から予想されていた。したがってこの点においても同博士論文には問題はない。そうではあるが、本論文では日本語の第一次資料および日本人による第二次資料がほとんど用いられていない事実は本論文のテーマからして極めて残念であり、同博士論文の価値を低減させるものといわざるをえない。氏が今後日本語運用能力を十分に身につけ、歴史研究のさらなる研鑽と発展が望まれる。

博士論文審査委員会は、本論文の問題点を勘案した上で、本博士論文が近年、注目される人種と対外関係というテーマに切り込んだ意欲的な研究であることから、博士学位に値すると判断した。